

「日本の軍神たち」

父・中桶武夫と弟分の山岡荘八、同時期、同出版社、同題名の本を著す

はじめに：

私の父・中桶武夫が軍神の本を著したことは知っていた。しかし、子供時代の私は、何の関心も持たなかった。私も60歳を過ぎて、自分の人生のいろいろな整理をする必要性を感じた。ふと、我が家に置いてある、父の本「軍神杉本五郎中佐」に目をやった。また、母が作成した、父の新聞記事の切り抜きを見た。すると、父の7歳年下の弟分に、かの有名な山岡荘八がいた。先輩に西条八十がいた。また、父の本は、陸軍省の推薦本となり、国民読本になっていることが分かった。また、本の完成を祝い、題字に、序文に、お祝いにかけつけた人々の名前に、阿部首相、近衛枢機相、畑陸相、板垣前陸相、陸軍大将、陸軍中將、等の名前があるので驚いた。また、戯曲も書き、杉村春子主演で、全国でラジオ放送され、また、劇となり上演されたことに驚いた。多少とも、軍神に関心が湧いてきた。

軍神って、一体何者なのか、誰のことか、何人いるのか、誰が決めたのか、いろいろと疑問がわいてきた。インターネットや新聞記事でいろいろ調べてみることにした。

「軍神」を検索する。83万件も出てきた。1ページ目を眺める。真珠湾攻撃で岩佐直治ら9名が軍神とされた。1942年、太平洋戦争で戦死した加藤建夫少佐が空の軍神とされた。軍神の誕生：軍神1号は広瀬武夫中佐で、海の軍神である。日露戦争の時だ。等々の記述が目についた。軍神の始まりは、出版社、等のマスコミが戦死者を称えたもので、それが定着したものである。公式の定義はないが、戦死して神格化された軍人のことである。等々。もう少し詳しく調べてみよう。

目次：

- | | |
|---------------------|------------------|
| 1章：インターネットの検索 | 9章：松岡外相と会談 |
| 2章：軍神各論 | 10章：杉村春子主演ラジオ放送 |
| 3章：「武人の鑑」、毎日新聞連載 | 11章：母・中桶貞子の手紙 |
| 4章：「軍神杉本五郎中佐」、中桶武夫著 | 12章：中桶悟光、歴史の謎をとく |
| 5章：「軍神杉本中佐」、山岡荘八著 | 13章：あとがき：歴史は動いた |
| 6章：新聞記事の切り抜き | 14章：その後の調査、 |
| 7章：弟分・山岡荘八 | 15章：付録、 |
| 8章：徳富蘇峰との約束 | |

中桶悟光著

1章：「インターネットの検索」

p2

1. 「**軍神広瀬中佐**」、**1904年に戦死**、を検索した。1万8千件も出てきた。1ページ目を眺める。港湾閉鎖に参戦した船の艦長が広瀬中佐。敵の魚雷が命中して戦死する。明治43年、広瀬中佐の銅像が建つ。日露戦争（明治37-38年）の英雄だ。2004年は100回忌。陸海軍合わせて軍神は17名いる。しかし、公式な定義は存在せず。文部省の唱歌になる。等々。

2. 「**軍神橘中佐**」、**1904年に戦死**、を検索してみる。約2000件出てきた。橘大隊長が日露戦争で戦死。2004年、100回忌を迎える。橘周太（1865-1904）明治の陸軍軍人。橘少佐は日露戦争の最前線で指揮をとり戦死す。明治37年（1904）に戦死、後、中佐になる。静岡第34連隊の軍神だ。実家は長崎県。等々。

3. 「**軍神杉山中佐**」**1937年に戦死**、を検索してみる。約1000件出てきた。杉山中佐の生涯を山岡荘八が描く。杉本中佐・死の中隊、大都映画になる。杉本中佐の本は130万部を超える大ベストセラーになる。「大義」の本を著す。杉本中佐は、広島出身、1900年、明治33年生まれ。同じく、広島出身、明治33年生まれの中桶武夫、軍神杉本中佐の著作本を出す。杉本中佐、日中戦争：支那事変（昭和12-13年）で戦死。

4. 「**軍神加藤少将**」**1942年に戦死**、を検索する。約2000件出てきた。空ゆかば、落とせど、隊長機、遂に自爆。空の軍神である。加藤中佐、死後、少将に2階級特進。

5. 「**軍神西住大尉**」を検索する。133件でてきた。西住小次郎。戦車隊長（死後、大尉）。軍神西住大尉。南京入城。山西討伐。支那の町。戦車の軍神西住大尉。等々。

6. 「**軍神南郷大尉**」を検索する。35件でてきた。満州事変、・・・隼戦闘機隊、玉砕。南郷茂男大尉。軍神南郷少佐。

7. 「**軍神荒木大尉**」を検索する。517件でてきた。満州事変、岩石の下敷きにて戦死。

8. 「**軍神松尾中佐**」を検索すると、663件でてきた。松尾啓宇大尉。熊本県出身。

9. 「**軍神岩瀬大尉**」を検索すると、28件でてきた。軍神岩瀬勝輔大尉。真珠湾。

10. 「**軍神関大尉**」を検索すると、2400件も出てきた。**カミカゼ特攻隊第1号**。

11. 「**軍神岩佐大尉**」**1941年、真珠湾攻撃にて戦死**、を検索すると、137件でてきた。岩佐直治大尉、死後、2階級特進。撃沈された船の乗組員、等、九軍神と呼ばれる。

メモ：日露戦争の広瀬中佐、橘中佐、を出版社が軍神と称えた所から、軍神が始まる。軍神の公式の定義はないが、死後、神格化されたもの。以後、軍が公式に軍神の名前を付けた。

メモ：以上、広瀬、橘、杉本、西住、南郷、荒木、岩瀬、松尾、加藤、関、岩佐、等、11名の軍神、プラス、九軍神の残り8軍神、合計19軍神が見つかった。乃木大将、東郷元帥、楠木正成・大楠公、を入れると、22の軍神が見つかる。

2章：軍神各論：

1：海の軍神広瀬武夫中佐（日露戦争）の資料：

生まれ：（1868－1904）

出身：大分県竹田市の出身、

戦歴：日露戦争の英雄、海軍の軍神

軍神の由来：理由：部下を思いやる心、実行動

戦死：1904年戦死、2004年は100年忌、

唱歌：大正元年、1912年、文部省唱歌作られる、

銅像：明治43年、銅像建つ

墓碑：下関の郊外、長府に墓碑が建つ、

神社：広瀬神社、

インターネットの件数：1万8000件

2：陸の軍神橘周太中佐（日露戦争）の資料：

生まれ：（1865－1904）、実家は長崎県、

戦歴：日露戦争の英雄、陸軍の軍神、静岡第34連隊の軍神、

軍神の由来：理由：

戦死：首山 攻略、最前線で壮烈な戦死、

唱歌：文部省唱歌になる、

映画化：1926年、日活で映画化される、

インターネットの件数：約2000件

3：立亡の軍神杉本五郎中佐（日中戦争）の資料：

生まれ：1900年、広島県に生まれ

軍神の由来：理由：壮烈な戦い、立ったまま死亡、立亡で伝説の人になる

戦死：昭和12年、支那事変（日中戦争）にて戦死、38歳、

映画化：1938年（昭和13年）、大都映画が映画化する、「死の中隊」

自著：「大義」を著す、

著作本：昭和15年、中桶武夫著「軍神杉本五郎中佐」、平凡社、

昭和17年、山岡荘八著「軍神杉本中佐」、講談社、

昭和17年、中桶武夫著「軍神杉本五郎中佐」講談社、

中桶武夫著「武人の鑑」、大阪毎日新聞連載、昭和15年11月1日から
12月31日までの61日間、61回の連載。

祭：大義研究会の主催で杉本中佐70年祭が開催される、靖国神社にて、

修行：三原の仏通寺にて禅の修業をする、巨大岩（10mサイズ）の石碑あり。

インターネット件数：約1000件

4：空の軍神加藤少将（太平洋戦争）の資料：

戦歴：空ゆかば、敵機を落とせど、加藤隼隊長機、遂に自爆、太平洋戦争、

戦死：太平洋戦争（1941－1945）、1942年か

p4

インターネット件数：約2000件

5：真珠湾九軍神（太平洋戦争）の資料：

9人の名前：岩佐直治大尉（死後、中佐）、ほか、古野、横山（正治）、広尾、佐々木、横山（薫範）、稲垣、上田、片山、（死後2階級特進）

戦死：特殊潜航艇にて出撃、真珠湾にて戦死、10名中の1名は捕虜にとられる、

慰霊碑：愛媛県伊方町に慰霊碑できる、三机湾にて、

インターネット件数：約3000件

6：神風特攻隊・軍神関行男大尉（太平洋戦争）の資料：

戦績：神風突撃隊の任務は、戦艦大和をはじめとする艦隊がルソン沖、レイテ湾に突入を援護するか、

戦死：神風第1号は軍神関行男大尉

インターネット件数：約2400件

7：戦車の軍神西住大尉（日中戦争）の資料：

戦死：1938年（昭和13年）、支那事変、日中戦争で戦死、戦車長（死後、大尉）

インターネット件数：133件、大阪毎日新聞に戦記が連載さる（昭和15年）

8：乃木希典大将（日露戦争）の資料：

生まれ：1849年、江戸の麻布、長府の毛利藩邸にて生まれる、

戦績：日露戦争（1904－1905）を勝利に導いた陸軍最高の名将、

戦死：明治天皇の崩御とともに自殺（自決）、超英雄に祭り上げられる、戦死ではない、

神社：乃木神社、全国に存在、

インターネット件数：25万6000件、凄い

9：東郷平八郎元帥（日露戦争）の資料：

生まれ：1847年12月22日、鹿児島、薩摩藩士の家で生まれる、

戦績：海戦で劇的勝利に導く、国家存亡の危機を救う、日露戦争の卓越したリーダー、

戦死：1934年5月30日、87歳、没、長生きする、

インターネット件数：40万件、凄い、

10：大楠公、楠木正成の資料：

生まれ：1294年、大阪府の生まれ、豪族の出身と言われる、

戦績：鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて活躍、大楠公38歳で鎌倉幕府を倒す、

インターネット件数：35万7000件、凄い、

以上です。詳細はインターネットをご覧ください。間違いがありましたら、お知らせ下さい。

3章：武人の鑑：毎日新聞連載：中桶武夫著：

p5

(昭和15年11月1日から12月31日までの61回の連載、対象は子供)

はじめに：国会図書館に赴き、マイクロフィルムからコピーしてきました。

毎日新聞に連載された、この軍神杉本中佐の資料は、山岡荘八研究者や軍神杉本中佐研究者、等、如何なる**歴史学者の資料**にも出てこない。それ故、関係者に捧げる意味もあり、内容の1部を紹介することにした。61回、毎日、連載された。その中で、最終回、61回目の内容のみ記す。他の部分にも関心のある方は、国会図書館で閲覧して下さい。

「ああ軍神」昭和15年12月31日付けの新聞に記載されたもの

そこで杉本隊長は、上田隊に80メートルに前進し、敵情・地形の偵察を命じ、他の者には休養させました。猛烈に火を吐く敵陣から雨・霰と降ってくる弾丸の中を、上田隊は前進し、他の者は小石まじりの固い土の中に、寒風が砂を吹き込む困難な作業を続けて土豪を掘り「明朝は、陛下の御ために潔く死のう」と固い誓いをたて、戦友相抱いて、その中で夢を結びました。

上田准尉は中岡伍長と共に敵陣深く進入し、決死の偵察に成功し、杉本隊長は、その報告を基にし、幹部を集めて午後4時を期して敵陣突入を決議し、全員を雨・霰と降り注ぐ敵弾下を敵陣80mの死角まで前進させ、そこで最後の訓示をしました。「我らが鍛えてきた団結の威力を発揮して、聖旨に副い、奉る時は今だ。団結せよ。」一同うなずき、悲壮な決意を示し、「我らは陛下の股肱なり。」と唱和し、わあー、と喊声をあげて敵弾を投げさせ、敵の銃座を知り、第2の喊声で敵が欺かれたと油断している時、隊長の合図で全員死角を躍り出て、隊長を先頭に、あわてて乱射乱投する小銃弾、手榴弾の中を、敵陣に突入し、剣道5段の杉本隊長は、敵陣に入るが早いか、敵数名を斬り倒し、なおも敵を追って進もうとする時、飛弾は隊長の胸部を貫きました。隊長はよろよろと三步前進し、左手で壕をおさえ、遥かに東方を拝し、挙手の礼をして「天皇陛下万歳し、天業の旗を、その上に置きました。身に48の手榴弾の破片を受けて倒れた岩村少尉、腕と足に貫通銃創を受けてなお奮戦中の上田准尉、その他、生き残った部下達は、皆そこに集まり男泣きに泣き、暫く黙祷しました。おりしも、敵陣に打ち立てた日章旗に朝日が燦として輝き、神がその絶忠をよしみ給う如くでありました。この日をもって、隊長は中佐に進級の恩命に浴しました。わずか38歳の生涯でしたが、中佐の忠魂は永遠に皇国を護るでしょう。(終)

メモ：杉本中佐、1900年、広島生まれ、昭和12年(1937)、支那事変で戦死

杉本中佐隊長は、戦死しても、そのまま倒れず、立亡で伝説の人となった。そのことが天皇陛下の耳に入り、杉本中佐の軍刀や遺品は東京に召され、**天覧の栄**に浴することになった。

4章：「軍神杉本五郎中佐」昭和17年、初版、中桶武夫著、講談社、 p6

B5版、254頁。この本は、青少年向けに出された2冊目の本である。

1冊目は、昭和15年、同じ題名：「軍神杉本五郎中佐」、平凡社から発行される。

B5版、700頁の分厚い大作だ。

最後の1項目のみ記す。他の部分も読みたい方は、ご連絡下さい。

「古今まれなる大往生」 p. 244 - p. 247

敵弾を胸に受けた杉本少佐は、心臓部を貫かれていたのである。その時、よろよろと二、三步進んで止まった。とともに左手で陣地の一端をおさえ、血のしたたる軍刀を突き立て向き直り、右手をあげて、はるかに日本の空、陛下おわします方をのぞんで敬礼し、礼拝したのである。ついで、かすかに「天皇陛下万歳」と奉唱して安らかに息が絶えた。だが、立ったままである。

その様子になんとなく異常を感じたのは、ただ一人伝令の前川上等兵であった。絶命したとまでは、まだ気がつかなかったが、声が万歳ともれたらしいのを怪しんで、「隊長殿」と呼びかけた。少佐は答えなかった。だが、立ったままである。「隊長殿」。やはり答えなかった。立った姿勢も動かなかった。「隊長殿、どうかなさいましたか」。上等兵は近よって覗き込んだ。とともに、こみあげて泣いた。少佐の胸と口、背にも血潮がしたたっていたのである。だが立ったままである。「御戦死か。ああ、とうとう戦死なされたのか。」上等兵はくずれ伏して泣いた。隊長の命令を正しくすみやかに伝達するのが、わが任務であったが、その発令の隊長の口は、もう永久に閉じたのであった。だが、立ったままである。暁の風の中に、閣山の最高峰に銅像のように立っているのである。禅に鍛えた修養の精神が、人間以上の不思議を現したのであろう。なんと言う壮厳な姿であらう。昔、妙心寺の開祖・山禪師の入寂は「座脱立亡」であったと言う。それは千人に一人もないと言う。その立亡であったのである。弁慶の立ち往生と言う昔話がある。陸軍歩兵杉本少佐は、古今まれなる立亡、立ちながら大往生を遂げたのである。はるかに東方を拝礼した尊皇の姿勢のままで、純忠の魂を形に残したままで。死しても生きるが如く、死しても、隊長ここにあるぞと。・・・それが指揮官健在なと言う信念を、全員にあたえていたのであった。その戦死を全員が知ったのは、陣地を奪取しえた時であった。しかし、まだ残る陣地がある。そこから敵弾がふりそそぐ。右と左の高地からもくる。前川上等兵は、この上に隊長の遺骸を損じさせたくない。敵の捨てた毛布を敷いて静かに壕の中に横たてた。他の兵も寄ってきた。負傷の上田准尉、岩村少尉もやってきた。准尉はわが香水を出してそそいだ。少尉は小磯大将閣下から贈られた日章旗を胸においた。一同はうやうやしく黙祷をささげた。「隊長殿、仇は完全にうちました。後続部隊も間もなくまいります」。

メモ：立亡なんて聞いたことがない。しかし、歴史上は、千人か万人に一人はいるみたいだ。禪師、軍神、弁慶、等は立亡。軍神杉本中佐は、立亡で伝説の人となった。

上田小隊長の偵察の結果は、予期したよりも遥かに厳しいものであった。敵前200mあたりからは殆ど応射できないほどの胸つく急坂のなっていて、身を隠すに足る一本の樹木も一つの岩塊もなかった。(中略)

五人斬った。六人死んだ。敵おしてはついに崩れ、算を乱して山から雪崩だした。七人斬った。八人死んだ。もうさしもの左文字も歪み歯こぼれして悲鳴をあげだしている。九人斬った。十人斬った。一一人斬った。……と、ああその時であった。逃げながら振り向きざまの投げた手榴弾が、少佐の背後で炸裂し、破片は深く軍服を貫いて少佐の背から胸に入った。少佐は、ぎくりと立ち止った。と、続いてこの猛将を狙って射った敵の一弾が、更に胸部を貫通したのである。しかし、少佐は倒れなかった。下げて歪んだ左文字を左手に持ちかえると、右手から、ぐっと東方へ向きをかえ、壕に寄り添って、左手の刀で体を支えたまま静かに皇居の方へ挙手の礼を捧げた。夜が明けかけた。敵の姿は、もう無かった。散乱した敵の兵器と死体と負傷者の間を、隊長、隊長は居られませんか。従兵の前川一等兵は少佐の姿を探し歩いていた。そして、そこに立ったままの隊長の姿を発見すると、自分でもハツツとして、皇居に朝の礼拝をすませた。どんな戦塵の中にあっても、必ず朝礼を怠らなかつた少佐の習慣を知っていたからである。しかし、それにしても今日の隊長の朝礼は永かつた。前川一等兵は恐る恐る少佐に近づき、少佐の顔を覗きこんだ。くわーっと見開いた双つ眼には何の変わったともない。が、きりりと締った唇の端から血潮が一筋糸をひいて、それが幾分下がった右手の挙手の袖のあたりに、黒く光って氷りついている。

隊長、前川上等兵の声がうはずった。ああ、体が冷たい、体が冷たい。しかし、少佐は、もう人の声では答えなかつた。あの猛く懐かしい頬髭が、暁の風に微かに動いて、魂はすでに肉体を離れていたのだ。いや、魂も肉体もない。生も死も無い。そこに有るのは、ただ一筋に皇基を護りぬかんとする不動不倒の絶忠が、群山を押し、暁を呼んで毅然と立っているだけであった。隊長。前川一等兵は、もう一度、肩を震わせて叫んだ。昭和12年9月14日の早暁である。

少佐は、即日、中佐に昇進、正六位に叙せられ、更に従五位、勲四等、功四級を授けられて、その愛刀は、かたじけなくも天覧に供された。そして、その遺書となった「大義」こそは、中佐の生身に代って、現に国是国策に堂々と寄与しつつある。座脱立亡は、伝説の武蔵坊と閻山慧玄禪師の他には、その例なく、三十八年、ついに絶忠の城に生死を越えた中佐の真面目でなくて何であろう。中佐は、いまま爛々と目を光らして立っている。頬髭を朝風になぶらせながら、永久に、皇基を守護しぬかんとして、不倒不屈、七生報国の絶忠に燃えて、じっと皇道世界維新の行く手を見守っている。(おわり)

メモ：他の部分を読みみたい方は、原著をご覧ください

6章：新聞の切り抜き：

p8

中桶武夫は早稲田の英文学卒である。広島県西条町下見の出身だ。広島県呉の県女、今の女子短大の教師をするかたわら、「世界少年少女詩集」を出版する。序文は、同じ早稲田卒の先輩・西条八十である。続いて、「大義」を著す。また「軍神杉本中佐」を平凡社から発刊する。2年後には、同じ題名の「軍神杉本中佐」を講談社から出す。この時は、山岡荘八も父のすすめで、同じ題名、同じ講談社から「軍神杉本中佐」を出した。また、父は毎日新聞にも「武人の鑑」を61回連載した。また、全国ラジオ放送のシナリオや戯曲も書いた。母・貞子は、父・武夫の新聞記事を丹念に切り取り、記録を残した。その一部を紹介したい。父は、最後は陸軍省の役人・司政官となり、出征して46歳の若さで戦死した。

1. 「定本杉本軍神脱稿」：新聞記事1：

中桶武夫著、平凡社。新聞名、日付、不明。昭和15年のはじめ。広島県呉の県女の教諭・中桶武夫氏は、既報の通り、「軍神杉本中佐」を執筆中であったが、いよいよ近く脱稿の運びとなった。同書は、従来、数種刊行されているものに比較して遥かに良心的であり、同著をもって杉本軍神の「定本」たらしめる意気と実質とを備えていると言われる。

平凡社の依頼を受け、今春以来、引き籠もっての執筆中のものだけに、その苦心惨憺ぶりも異常なものがあり、かつ、材料も各種と広範囲に亘って集められ日常茶飯事の中に好評を有する興味的なトピック物まで収録されている。題字やら序文も既に好意的にすすんで寄せられる有様に著者の感激も一段と募っている。これら名士の顔ぶれも、近衛枢相、阿部首相、をはじめ畑陸相、荒木文相、板垣前陸相、真崎、小磯陸軍大将、建川、柳川陸軍中將、山崎仏通寺管長、その他にわたる豪華ぶりである。中桶氏は郷土を同じゅうする軍神のために全霊を打ち込んでいると言ってよい。中桶氏の「軍神劇」は、既に、中央で脚光を浴び、キネマにラジオで紹介された。中桶氏は早稲田英文科出身の篤学俊英な教育家、ならびに、青年学徒として知られ、中桶氏の著書、英文「少年少女詩集」・・・、教科書中における・・・出版は読書界を賑わしたものである。

2. 秩父・賀陽、両宮殿下台覧の「軍神杉本五郎中佐」：新聞記事2：

今回。中桶武夫著「軍神杉本中佐」は、閑院宮家の事務官から献上し、嘉納になり、更に、中桶武夫氏は、秩父宮家の事務官・前田伯爵に面会し、秩父宮家殿下に、「大義」と「軍神杉本中佐」を献上し、台覧を賜った。また、賀陽宮家殿下にも献上、台覧を賜った。また、陸軍省の推薦図書となった。

3. 中桶武夫の業績：軍神杉本中佐の伝記完成：新聞記事3：

今回、東京「平凡社」から発行された「軍神杉本五郎中佐」の著者たる呉在住の、中桶武夫氏は広島県西条下見の出身で、早稲田英文科卒、兄・中桶一登は、黒瀬小学校の校長であるが、この著述をなすに当たっては、東奔西走、小磯陸軍大将、板垣陸軍中將をはじめ、幾多の名士と会見、山なす資料をかき集めた。中桶武夫氏は執筆から6ヶ月かけて、ようやく脱稿したものだ。

7章：弟分・山岡荘八の活躍内容：何故、兄弟分か：

p9

父・中桶武夫は昭和15年、「軍神杉本中佐」を著した。山岡荘八は、出版社の仕事をし、また、作家としても活躍していた。父は本の出版でしばしば東京に出張していた。東京では、必ず、山岡荘八の家に泊まっていたそうだ。父は山岡荘八より7歳も年上である。山岡荘八にも、軍神の小説を書くようすすめたそうだ。2年後、山岡荘八は、父と同じ題名の本を発行した。父も、同時期、同出版社、同題名の本（ただし、2冊目、少年向け）を発行した。その事実より、父と山岡荘八が、特別の関係で、兄弟分であったことが分かる。しかし、いろいろ文献を調べてみて、**山岡荘八研究者**や**軍神杉本中佐研究者**、等の歴史学者は、**その事実**（何故、二人が、同時期、同出版社、同題名の本を著したか）を知る者は居ないみたいである。その人たちに、この作文を捧げたいと思う。

さて、父・中桶武夫と弟分・山岡荘八が、何時から何時まで、親しい関係にあったのか考えてみたい。軍神杉本中佐が戦死したのが、昭和12年として、その後、軍神の本の制作を開始して間もなく、関係が出きたと思われる。では、何時、関係が終わったのであろうか。父が昭和18年、出征してからは、必然的に関係が無くなっていったと思われる。即ち、昭和13年から昭和18年まで、父と山岡荘八の関係は続いたものと考えられる。一つ残念なのは、戦後、検閲がこわくて、山岡荘八の数10通にのぼる手紙を母は焼却したそうである。詳細は闇に葬られてしまった。山岡荘八の家には、父の手紙が残っているかも知れない。

では、昭和13年から昭和18年までの、山岡荘八の活躍を調べてみよう。

1. **山岡荘八のペンネーム**は昭和9年8月からである。2度にわたる出版業に失敗し**昭和11年頃から短編小説**を書くようになる。
2. 昭和13年10月、時代小説「約束」を書く。
3. 昭和17年、従軍記者として「海底戦記」、「潜艦同乗記」を書く。
4. 昭和17年、「軍神杉本中佐」を書く。
5. **昭和18年になると長編小説「御盾」**：みたて：を書く。
6. 昭和22年**公職追放**される
7. 昭和25年10月、**追放解除**となり、本格的に執筆活動を再開する。
8. **昭和25年から、長編小説「徳川家康」**の執筆にかかる。

以上、父・中桶武夫と弟分・山岡荘八が親密に関係していたと思われる昭和13年から昭和18年までに、山岡荘八が書いた小説は、従軍記者として書いた戦記ものがある。軍神を書く必然性は見当たらない。やはり、父のすすめで書いたものと考えられる。また、父が昭和18年、出征する前に、今度は戦国時代の軍神・徳川家康を書くようすすめたそうだ。残念ながら詳細を知る手がかりとなる、山岡荘八からきた数10通の手紙は、戦後の検閲がこわくて母は焼却したそうだ。山岡荘八の家に、父の手紙がある可能性はあるが。

8章：徳富蘇峰先生との約束：約束の中身は謎だ：

p10

昭和15年8月9日、朝、山荘に徳富蘇峰先生を訪ねるべく御殿場より山中湖行きバスに乗った。金剛杖を持った登山者、キャンプに出かける青少年でバスは超満員である。途中下車するには窓から降りる他はない。新緑に燃える広大な裾野をバスで走るのは愉快だ。遙か彼方に清水港沖の海を見られる景色は爽快で雄大だ。路傍に生い茂る萩の花、色とりどりに咲き乱れたる秋の七草、その中に顔を覗かせている釣鐘草、真紅の山百合、等、可愛い。籠坂峠を越えると、清明な山中湖が見える。湖畔に徳富蘇峰先生の別荘がある。

森の中では小鳥が歌い、谷間では鶯が鳴いている。美しき景色、愛すべき国土、今更ながら、日本の国土に限りない愛着と誇りを感じる。

徳富蘇峰先生の双宣荘は浜辺に近い森の中であって、玄関に続く道には、萱が生い茂り、萩が咲き零れ、色とりどりの草花が咲き匂っている。広い日本間の窓辺に椅子を並べた応接間に通ると、ガラス窓の外の樹陰に草花の香る清らかな庭があり、草を愛し、木を愛し、花を愛し、小鳥を愛で、大自然と一体なる生活をしておられる徳富先生にふさわしい山荘である。

蘇峰先生は、髪や髭こそ銀白であるが、つやつやとした血色のよい赤ら顔で78歳とは思えない元気に満ち溢れておられた。ある事柄を依頼すると、「公益になることなら・・・」と快く約束して下さった。流石、国家のために一身を捧げておられる先生の風格に接して、自然に頭が下がる思いがした。要件を述べ、用事を済ませ、その後、蘇峰先生に質問してみた。「先生のお書きになったものを拝見しますと壮者をしのぐ元気に満ち溢れておられますが、どういう健康法を取っておられますか」と。先生答える。「いや、神経痛ですこし弱っている。これといった健康法はやっていないが、よく歩く、よく寝ることが、いわば私の健康法だ。大森から民友社へ行く30分間も自動車で眠ることにしている。ここでも疲れると30分ほど寝る。すると元気が快復して、一日で二日分働ける気持ちがある。

「先生は、大変、たくさんの書物をお読みになりますので驚嘆しております。どういう読書法をとられているのですか。「ははーん、読書は子供の頃から速い習慣がついている。人が本当にしないので、では、何でも聞いてみる、と言ったもんだ。」

用件、約束を済ませ、政界に精通し、国宝的な先生の健康を祈りながら、蘇峰先生の別荘をあとにした。

メモ：父・中桶武夫が徳富蘇峰先生と交わした用件、約束は何であろうか。謎である。その後、謎を解く別の新聞記事を見つけた。

昭和15年7月11日付けの新聞記事：

徳富蘇峰先生の新聞記事「軍神杉本五郎中佐」について：・・・一面から見れば、君は、まさしく、国体学の博士である。しかも、君は単にこれを言語・文字の上において、その宣伝者であるばかりでなく、身を以て、その実行者となった。即ち、この本は「中桶武夫」君の編述にして、これを一読すれば、**広瀬中佐や橘中佐に劣らぬ軍神**であると断言できる。

メモ：謎は解けた。国益のため「軍神杉本中佐」の書評を書くことを約束したのだ。

9章：霞ヶ関に松岡外相を訪ねる：

p11

昭和15年8月19日の午後、国民の要望を担って誕生した、第二次近衛内閣の花形新外相松岡洋右氏を外務省を訪ねた。二階応接間に待っていると、窓外に生い繁っている檜の木立で、ミンミン、せみが鳴いて暑苦しい。国事に多忙を極めておられる外相閣下は、暑さなんか考える閑はなからう。

朝の廊下を、流暢な英語で話しながら、2、3人の人が通られるのが、聞こえた。「ははーん、外相が外国使臣と英語で話しておられるのだなー。もし、外国語に堪能でない外相だったら、不便だろう」と思った。

やがて大臣室に通されると、閣下は詰襟の純白の麻服を着て、事務にとっても忙しそうで、暑さなぞ眼中にない風であった。用件を述べたあと、・・・

「新政府体制の定義を下し得る者は誰もいない、と言う者がありますが、新政治体制といい、現内閣の方針といい、結局、杉本中佐などの唱えた皇政維新、皇国の真姿顕現と根本は同じではないかと思うのでありますが、真相はどういうものでありましようか」と尋ねると、「そうだ、国内一体、日本精神に立ち返ることが根本だ。日本精神の顕揚とは、天皇を知ること、すなわち、天皇に帰じ奉ることだ。外交も、八紘一宇の実現皇道宣布に他ならない。それが出来れば他のものはすらすらと行く。経済機構といい、軍備の問題といい、自然と解決して行く、自分が、以前、回答問題を提げて全国を遊説して歩いたのも、政治運動ではなく、精神運動である。私は一国一掌主義を唱えているのではなく、一国一体を説いているのである。今、われわれの主張が通る時代が来たのである。」

閣下の話が、皇室、国家の話になると、語調は次第に熱を帯び、椅子より立ち上がり、眼光は輝き、拳を振って、雄弁に語られるのであった。信念の人、熱の人、勇猛果断の人、雄弁家としての外相の風貌に接した私は、彼の国際連盟脱退の歴史的な演説を想像するのであった。

次に、話題を転じて、「閣下は外国使臣と直接、英語でお話になりますか」と問うと。「うむ、通訳では、まどろしく、痒いところに手が届かんからなー、陛下の御ため、七ヶ国ぐらい話せばよいと思うが、英語だけでは申し訳ないと思っている。だが、私は日本語で話していると言っている。言葉は英語でも、日本精神で話しているからだ。」

やがて、四相会談が始まるので謝辞を述べ、皇国の進むべき道は、現内閣の方針より他はなく、国民一体となり、政府の推進力を弱めないよう協力し、もって、天譲無窮の皇運を扶翼し奉らねばならぬことを痛感しながら、霞ヶ関を去った。

メモ：

父は、松岡外相に用件を述べた、との記述がある。その後の松岡外相の言動を示す資料を探した。見つかった、謎は解けた。軍神杉本の著作本の感想を聞き、今後、国民に、著作本にかかれた日本精神を国民に説話してくれるよう依頼したのである。

10章：ラジオ・ドラマ「大義」、中桶武夫原作、薄田研二、杉村春子、主演、 p12

1. 過ぐる天津事変に杉本隊長は、自分の部隊を「死の部隊」と称し、全部隊員一同の血書をもって、中隊旗を作り、数々の武勲をたてた今、事変起こるや、「死の部隊」に再び勇躍征途についたのである。杉本部隊長は家訓として大義の章に「我を見んとせば尊皇のあるところに我あり」と、その子供たちに訓へた「大義」20章はやがて成長していく子供達への訓戒であり、また、皇国日本人として生きて行く大いなる信念でもある。北支宛て平泉城の戦いは壮烈を極めた、禅道深く、無我の境地まで到達の部隊長は敵弾に倒れたが、再び、立ち上がり遥かに東方、大元帥陛下まします方を伏し、拝み、こときれた。真に壮絶、大丈夫の器を死の直前直後まで操じ、皇国軍人として昭和の軍神として38歳の果敢なる生を終わったのである。

配役は・・・

杉本中佐：薄田研二、定枝夫人：杉村春子、前川上等兵：三津田健、・・・解説：中江良介

2. 劇「軍神杉本中佐」さきに、本紙に連載されて、好評を博した、中桶武夫氏原作の戯曲「軍神杉本中佐」がラジオ放送されることになった。作者中桶武夫氏は、かねて放送劇の上演をすすめられて、「軍神杉本中佐」を大劇場向けに書き改めていたが、苦心の結果、ようやく三幕七場の戯曲が出来上がり、これを新国劇の樋口十一氏が「大義」の題下のもとに脚色したものである。新劇薄田研二、杉村春子、らにより、今日、9日、午後8時半から40分間、AKから全国中継で放送されることになったものである。

1 1 章：母・中桶貞子の手紙：

p13

静岡県浜松市に住んでいた私は、ある時、東京にいる母・中桶貞子に聞いてみた。父・中桶武夫と山岡荘八、西条八十、杉村春子、等との関係はどうだったの、と。すると、母から手紙がきた。

1. 山岡荘八：

兄弟分の山岡荘八氏とパパ（中桶武夫）は、大義の発行に傾倒していました。杉本中佐は、「立亡」と言っ、前例の無い、暫く、命果てても立っていたと言う人です。当時大きく新聞に掲載され軍神杉本中佐の立亡ということでニュースとして日本中、駆け廻ったものです。後年、パパが取り上げた芝居、ラジオ、にも大きく取り上げられ、「大義」の出版でパパも「時の人」になり、各新聞社に取り巻かれたことを覚えています。その後、毎日新聞に、いろいろ記事を書いていたので、2回、3回、締め切りの期限前、幼かった、アンタ（次男・悟光）を背負い、大阪の本社に駆け込んだことを覚えています。現在、そちらに有る花瓶は、後日、杉本中佐の兄上から、お礼に戴いた記念品です。

山岡荘八氏は、パパと兄弟分ということで、パパが兄貴と言ったところで、非常に親密な仲でした。

当時、上京の折には、荘八氏宅が宿泊先ということで、荘八氏の、「大義」とか「徳川家康」の出版は、**パパの進言**で応援していたと言うことです。

荘八氏の手紙は、何10通もありましたが、戦争、戦犯の捜索で、**兄・中桶一登**伯父のすすめで、危険をさけるため、他の書類、政府高官などから戴いた書などと一緒に焼却しました。

「大義」のパパの本も荘八氏の家康の本も、現在、手元にあります。荘八氏と生前お会いしたいと思っていましたが、機会がなく、少々残念に思います。

2. 西条八十：

西条八十氏は手紙を差し上げ、返事をもらったことを思い出します。パパの戦死、大変悔やんで、慰めていただいたものです。パパの文才、本当に惜しい人物との文面は、今でも覚えています。

3. 母の手紙を読んで：

私は、母の手紙を読んで、私が幼い時、母が私を背負い、大阪の毎日新聞社に原稿を届けに行った話を考えてみた。私が1歳か2歳の時であろう。即ち、私は昭和13年生まれであり、昭和14年か15年の話である。**国会図書館に赴き**、昭和14年と15年の毎日新聞の連載記事を探した。最初に、戦車の軍神・西住大尉の戦争で活躍する連載記事を目にした。粘り強く、父の連載記事を探した。昭和15年の11月1日から12月31日までの61日間の**61回連載記事を見つける**ことができた。その時のマイクロフィルムからコピーした物の一部を3章に示した。

1 2 章：中桶悟光、歴史の謎をとく：

p14

謎1：父・武夫、山岡荘八と同時期、同出版社、同題名の本をかく理由：

中桶武夫著、および、山岡荘八著の「軍神杉本中佐」を考えてみた。中桶武夫の著作本を見ると、山岡荘八と同時期、同出版社、同題名の本を著している。謎である。謎を解いてみよう。1つは、母の手紙である。父・中桶武夫は山岡荘八と兄弟分の関係にあり、非常に親密な仲であったと記されている。東京に出張の折には荘八氏の家に宿泊していたと言う。しかし、歴史的必然性に欠けている。時系列的に考察すれば、軍神杉本中佐が戦死したのは、昭和12年である。同郷、同年齢の中桶武夫の作家としての本能が、軍神杉本中佐を描くことになった。そこに、東京の平凡社から、執筆依頼が舞い込み、著作本「軍神杉本中佐」が誕生した。また、そこで東京在住の作家・山岡荘八と巡り合い、大義の精神に傾倒して行くうち、二人は親密な関係になっていった。中桶武夫は山岡荘八より7歳も年上である。既に、「軍神杉本中佐」を出版していた。しかし、2冊目の「軍神杉本中佐」を書く構想を練っていた。そこで、兄弟分になった山岡荘八にも「軍神杉本中佐」を書くようすすめた。そこで、二人が、同時期、同出版社、同題名の著作本「軍神杉本中佐」を書くに至ったのだ。そう考えると、歴史の謎はとける。

謎2：徳富蘇峰を山中湖の別荘に訪ねる理由：

父・中桶武夫は静岡県・山中湖の湖畔にある、徳富蘇峰の別荘を訪れた。そこで、ある事柄を依頼した。徳富蘇峰は、公益になることであれば引き受けましようかと、中桶武夫の申し入れを引き受けた。しかし、その内容については、一言も記されていない。謎である。その謎をとくため、以後の、徳富蘇峰の言動を示す資料を探した。見つかった。2つの新聞記事である。そこには、徳富蘇峰が、中桶武夫著「軍神杉本中佐」について書評を新聞紙上で発表していた。きみは正しく国体学の博士であり、・・・軍神杉本中佐は、軍神広瀬中佐や軍神橋中佐に劣らぬ軍神である、と記されていた。徳富蘇峰は、国益のため、この記事が新聞に載せたのである。これで、山中湖の別荘において、中桶武夫と約束した内容の謎が解けた。国益のため、との謎も解けた。

謎3：阿部首相、近衛枢機相、等、政府要人が駆け付ける理由：

中桶武夫は「軍神杉本中佐」の原稿を脱稿した。すると、題字に、序文に、お祝いに駆け付けた人たちの中には、近衛枢機相、阿部首相、畑陸相、板垣前陸相、等の政府要人の名前が勢ぞろいしていた。謎である。何故、1著作本のために、政府要人が勢ぞろいするのであろうか。実際に、父の著作本「軍神杉本中佐」を開いてみた。たしかに、板垣大臣、小磯大臣の題字が見えた。謎を解く鍵は、当時の日本をまとめる精神を解き明かす必要がある。当時の日本は、大義の精神の元、日本人の心をまとめる必要があったのだ。父・中桶武夫の著作本は、正しく、この大義の精神を描いたものである。そのため、父の著作本の完成を、政府の要人が勢ぞろいで祝ったのだ。これで謎は解けた。

謎4：松岡外相に用件を述べる理由：

p15

父・中桶武夫は、霞ヶ関に松岡外相を訪れた。そこで、内閣の方針は、軍神杉本中佐の主張する精神と同じと思いますが、真相は如何なものでしょうか、と松岡外相に尋ねた。その通りだ、との答えを引き出した。その後、ある用件を述べた。松岡外相は了解し、次の話題に入った。問題は、父が松岡外相に述べた用件である。何も記されていない。謎である。その謎を解く鍵を求めて、その後の松岡外相の言動を示す記録を探した。残念ながら、求めていた資料は見つからなかった。推測するに、軍神杉本中佐の大義の精神を描いた、父の著作本を政府内に広めて戴くお願いかと思われる。その成果として、「軍神杉本中佐」の完成に、政府の要人が駆け付けたものと考えることができる。そう考えると謎はとける。

謎5：奥に秘められた理由：

父が軍神杉本中佐を書くよう山岡荘八にすすめたのは、単なる親密の仲からきたものであるだろうか。謎の、更に奥にひそむ謎を解き明かしたい。その奥にあるものは、軍神杉本中佐の大義の精神を、より広く世間に広めたいがために山岡荘八にも協力してくれるよう、お願いしたものと考えることができる。当時の、山岡荘八は、従軍記者として活躍していた。他の人と同じ題名の本を出版するのは非常に珍しい。常識では考えられない。どうやら父が、無理やり山岡荘八に軍神杉本中佐を書くようすすめたのではなく、頼み込んだ確率が高い。そう考えると、全てのことがらが無理なく、つじつまが合ってくる。更に、一步すすんだ謎が解明された感じがしてならない。

謎6：バラバラな多くの人たちが登場する理由：

この軍神の作文には、一見関係のなさそうな、近衛枢機相、阿部首相、畑陸相、板垣前陸相、等の政府要人、また、霞ヶ関まで出かけて会談した松岡外相、作家の山岡荘八、日本の新聞王・貴族議員を歴任した徳富蘇峰、等が出てくる。しかし、全員に共通する、あるものが存在するのだ。それは、日本を1つにまとめる大義の日本精神なのである。その日本精神のもと、政府の要人、作家の山岡荘八、新聞王の徳富蘇峰も一体となるのである。そう考えれば、何故、いろいろな人間が登場してくるのかの謎を解くことができるのである。阿部首相、近衛枢機相、松岡外相、等の政府要人たち、作家の山岡荘八、および、新聞王で貴族議員の徳富蘇峰は、一見バラバラのように見えるが、大義という日本精神のもと、一本の糸で結ばれた人たちなのである。全て、同じ心で結ばれている人たちなのである。そう考えれば、全ての謎が解明できる。

謎7：中桶武夫の兄・中桶一登、資料集めに東奔西走：

新聞記事を見ると、広島の中黒瀬小学校の校長をしていた中桶武夫の兄である中桶一登が、陸軍大将、陸軍中將や政府要人に会い、「軍人杉本中佐」に必要な資料を、東奔西走して、かき集め、6ヶ月後、弟の中桶武夫が執筆を開始したとある。何故、中桶武夫自身が、東奔西走して、必要な資料集めをしなかったのでしょうか。謎だ。

1：母の導き：

平成20年2月26日は、母の7回忌である。私も70歳、古希を迎えた。ふと、父・中桶武夫がインターネットに載っていないかと考えた。母の導きかも知れない。

あった、父・中桶武夫の名前が、いくつか出てきた。驚いた。まさか、まさか。70歳にして、初めて知る、父の業績である。70年近い前の、父の著作本が、いまだに市場で取引されているのに驚いた。定価1円50銭の本が6000円で、定価2円80銭の本が8000円の高値で取引されている。驚異だ。70歳まで生きていたお陰で、初めて知る、父の業績だ。70歳まで生きていて良かったと、つくづく思った。

平成20年3月7日には、ヤフーのオークションで、父の著作本、定価1円50銭のものが、3000円で、**競り落とされた**。驚きだ。父は亡くなったが、父の著作本は、今日現在、70年を経過してなお、いきいきと**生きている**のである。

弟分・山岡荘八も、父のすすめで、同じ題名「軍神杉本中佐」の本を発行した。その本も調べてみた。定価2円20銭である。調べたところ、3000円で取引されていた。同様に、感激した。この本は、**私、中桶悟光が買う**ことにした。インターネットで発売元の古本屋を調べて、購入の手続きをとった。

2：その時、歴史は動いた：

昭和12年、支那事変で杉本中佐は、壮烈な戦死を遂げた。父・中桶武夫と杉本中佐は、同じ広島県生まれ、かつ、近くである、かつ、同年齢である。父は早稲田英文科卒の作家である。作家の本能が、杉本中佐の壮烈な死を記録することになったと推測される。そこに、**東京の平凡社から執本依頼**が、舞い込んだ。その時、歴史は動いた。「軍神杉本中佐」の著作本の**誕生**である。また、平凡社が東京にあることから、**東京在住の山岡荘八**との親密な関係が生じたものと推測される。その時、歴史は動いた。父は、静岡県の山中湖の湖畔にある徳富蘇峰の別荘を訪ねた。徳富蘇峰は、**公益のため、「軍神杉本中佐」の書評**を新聞に載せたのである。「杉本中佐は、軍神広瀬中佐や軍神橋中佐に劣らぬ軍神であった」、と。その時、歴史は動いた。父は、陸軍とも密切な関係にあったらしい。そこで、父の著作本は、**陸軍省の推薦本**となり、**国民読本**となった。父は、最後は**陸軍省司政官**となり、出征した。その時、歴史は動いた。

1 4 章：その後の調査：歴史の時系列的解析：

p17

1. 昭和12年9月14日、軍神杉本中佐、戦死：軍神杉本中佐は明治33年、広島県の片田舎、**呉の三条**に生まれた。昭和6年12月、大尉として北支に赴く。いったん帰国し、昭和12年8月には、少佐として部隊を率いて北支に出征した。

昭和12年9月14日、戦死した。

2. 中桶一登、軍神の資料集めを開始：中桶武夫の兄・**中桶一登**は、当時、広島県**中黒瀬の小学校の校長**であったが昭和14年の3月頃から、真に東奔西走し、小磯大将、板垣中将、をはじめ、幾多の政府高官や名士と会見し、**山なす資料**を集めた。軍神杉本中佐の戦死から1年半後のことである。東京の出版社である平凡社から、軍神杉本中佐の執筆依頼があったのは、その前であるから、おそらく昭和13年の暮れあたりであろう。

3. 中桶武夫、軍神の執筆を開始：6ヶ月で脱稿：中桶武夫は**昭和14年9月**ころから執筆に取り掛かり、昭和**15年の1月**、ようやく脱稿したものである。殉皇大義に生き抜いた、軍神杉本中佐の真骨頂を遺憾なく浮き彫りにした。

4. 昭和15年に、「軍神杉本中佐」を著した中桶武夫の出身は広島県の西条町下見であるが、住居は、**呉の今西**で、杉本中佐の隣の町であった。二人は、**目と鼻の先**に住んでいたのだ。また、明治33年生まれで、軍神杉本中佐と同年齢であった。

中桶武夫と軍神杉本中佐の二人は、**同郷、同年齢**であったのだ。

5. **山岡荘八**は、直接は、軍神杉本中佐とは関係なさそうである。しかるに、**山岡荘八**が、昭和17年に「軍神杉本中佐」を著したのは、何故であろうか。まさに、父・中桶武夫のすすめに違いない。しかし、単に頼まれて書いた訳でもなさそうだ。問題は、両者、ならびに、阿部首相、近衛枢機相、畑陸相、板垣大臣、徳富蘇峰、松岡外相、らは、**共通した日本精神**と言う1本の糸で結ばれていたのだ。まさに大義の精神であろう。

6. **昭和15年5月6日**、徳富蘇峰、軍神の書評を世に出す：新聞王、かつ、貴族議員の徳富蘇峰が、国益のため、「軍神杉本中佐」の書評を新聞で公表したのは、昭和15年5月6日のことである。

7. **昭和15年8月9日**、中桶武夫、徳富蘇峰を訪れる：「軍神杉本中佐」の著者・中桶武夫が、静岡県の山中湖のほりにある徳富蘇峰の別荘を訪れたのは、8月9日、**徳富蘇峰は、78歳**と記されている。昭和14年なのか、昭和15年なのかが分からない。昭和14年とすると、徳富蘇峰が、「軍神杉本中佐」の書評を新聞に公表した、昭和15年5月6日まで、1年近くも、間があいている。おかしい。おそらく、昭和15年8月9日に、徳富蘇峰の別荘を訪れたのであろう。徳富蘇峰の生年月日を調べると分かる。すると、別荘で依頼したこと、徳富蘇峰が、国益のためにやりましょう、と答えた内容は、「軍神杉本中佐」の書評を世間に公表することではない。別に、また、何かを依頼し、徳富蘇峰は、国益のためにやりましょうと答えたのである。問題は、その内容である。現在、分からないので謎である。昭和15年8月、以降の、徳富蘇峰の言動を示す資料を、国会図書館で調べれば、**謎は解け**そうだ。

昭和15年11月1日から12月31日まで、軍神を連載：父・中桶武夫は昭和15年の暮れ、11月1日から12月31日まで、61回にわたり、大阪の毎日新聞に軍神杉本中佐の小説を、題名「武人の鑑」として連載した。その間、母・中桶貞子は、幼い次男、悟光、2歳を背負い、大阪の毎日新聞社まで原稿を届けに通った。

9. 昭和17年、2冊目の軍神の本を著す：中桶武夫は、青少年のため、再度、原稿をねり、2冊目の「軍神杉本中佐」の本を発刊した。以前の本は廃刊した。

10. 昭和17年、父の弟分・山岡荘八も「軍神杉本中佐」を発刊する。しかも、同時期、同出版社、同題名である。歴史上、二人の作家が、同時期、同出版社、同題名で小説を書くことは、有り得ない話、起こり得ない話であり、非常に珍しい話である。それには確とした理由があるのだ。兄弟分で、特別、親密な関係であったのだ。山岡荘八が軍神杉本中佐の本を書いたのは、父のすすめである。しぶしぶ、お付き合いで書いたのであるうか。いな、軍神の大義の精神に傾倒したためである。

11. 父・中桶武夫と弟分・山岡荘八の関係：

父・中桶武夫は東京にでると、山岡荘八の家を宿泊所としていた。山岡荘八も、私や父・中桶武夫が住んでいた、広島の実家、しばしば訪ねてきた。母・中桶貞子は、しばしば、東京の山岡荘八に、広島名産のかきを送っていた。お互いの家を行き来する仲だった。

12. 昭和18年、中桶武夫、出征す：中桶武夫は陸軍の役人、司政官となり、昭和18年、フィリピンに出征した。当時、長男・章道は11歳、長女・明美は8歳、次男・悟光は6歳、次女・和子はゼロ歳である。父は、ゼロ歳の赤ん坊の次女・和子を残して出征したのである。それ以来、今日現在、64年が経過した。私も70歳の古希を迎えた。

13. 昭和20年8月、終戦：昭和の8月6日、広島に原爆が投下された。父・中桶武夫は46歳の若さで戦死した。長男・章道は、中1、13歳で被爆死した。8月15日、終戦の日を迎えることとなった。長い長い戦争の歴史は、終わりを告げたのである。以後、軍神の歴史も終わりを告げた。日本国のためとは言え、2度と犠牲者が出ないことを祈る。(おわり)

15章：付録

以下、母・中桶貞子が残した貴重な歴史上の事実を示す、父・中桶武夫の新聞記事や、平成を迎えた現在、70年も経過してなお、取引されている、父・中桶武夫の著作本「軍神杉本中佐」の市場価格を示す、インターネット上の記事、等を示す。

1. 昭和15年、前後の新聞記事
2. 母・中桶貞子の手紙
3. インターネットの記事

平成20年3月25日 武夫・次男、中桶悟光